論文要旨

Material Maximalism（素材極限主義）による命の転写
― 生、死、そして祈りへ ―

東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程
美術専攻　工芸研究領域(鋳金)
髙橋賢悟

本論は、筆者のアイデンティティ、過去作のコンセプト、技法の構築、自己の体験などを振り返りつつ整理することで見えてきた新たなテーマ、「祈り」にもとづいて制作した博士提出作品《Re:pray》について論じた。

本論は３章からなる。第Ⅰ章では、自らの制作を貫く思想とその成立過程について論じた。まず筆者の故郷からアイデンティティを見直し、制作の鍵となる「自然に対する畏敬の念」について述べた。つぎに過去の自作を「生」と「死」に整理し、「生」の金属造形として津田信夫の影響を受けつつ新しい造形とした動物造形を取り上げた。いっぽう「死」の金属造形として《flower funeral　シリーズ》を取り上げ、その源となった明治工芸の超絶技巧について「集合美」という概念を提唱した。これらの制作過程のなかで、生きるための普遍性を半永久的な金属に託したことへの気づきと、鋳金こそは筆者にとって「生命ための永遠なる祈り」であると意味づけた。そのうえで、ある素材にしか出せない表現を追求するために技法を創意工夫し、自己表現を行う思想として「Material Maximalism(素材極限主義)」を提唱し、近代工芸の歴史をなぞり、この思想の立ち位置を論じた。

第Ⅱ章では、制作において「表現」・「技法」・「素材」の整合性を考察した。金属という「素材」、鋳金という「技法」でしか得ないことを中国の殷代の青銅器と、鈴木長吉の作品から考察した。筆者は現物鋳造法と真空加圧鋳造法という「技法」と、アルミニウム という「素材」に可能性を見出し、鋳金史上、はじめて厚さ0.1mmという超極薄鋳造物を成功させ、生花そのものを完全に金属で表現することを可能にした。そのプロセスについて論じつつ、コンセンプトと技術を強くリンクさせる「表現と技術の一致」を繰り返すことで表現力が強度を増していくことを論じた。すなわち、筆者にとって鋳金のプロセスは生命への花向けと再生・転生であると位置付けた。

第Ⅲ章では、博士提出作品について、コンセプトや制作過程について論じた。震災後の体験をもとに「祈る」ことが生きるために必要な行為であるとした。過去の自作において自身に芽生え始めた自然崇拝的な宗教観について、和辻哲郎の著書『風土』の記述等から原始宗教とされる自然崇拝の芽生えを芸術の域へと昇華させることを論じた。展示では過去と現在の普遍的な死生観と相対することで、未来を生きるために「祈る」ことへの原点回帰を目的とした空間構成を思案した。本展示の核となる未来については、「祈る」対象として、自然の威厳を動物の角の造形に見出し、造形化を試みた。その制作にあたってはスケール感が必要とされたが、大型品を制作することに向かない真空加圧鋳造法の限界を

探ることでもあった。そのため求めるサイズと薄肉でできたアルミニウム作品の素材強度、作業量の限界サイズが拮抗したサイズを計画し、かつてない規模のサイズを設定した。製作中は構成や強度、運搬時のための分割するための構造など大きさのために様々な問題が生じたが、その問題を乗り越えた経験は大きな糧となったことを論じた。以上、博士展を通じて空間制作までの展開、現物鋳造のサイズの拡大と成功率の向上、生の金属造形として簡素化した動物造形と死の金属造形として集合美による造形の融合を目指したことを論じた。

結論として、作品においては自然という壮大なテーマに挑戦したことにより、現物鋳造法と真空加圧鋳造法によって自然美と素材美の融合を果たし、自身の「祈る」対象の具現化を実現させ、さらに論文により理論的な裏付けを得ることで、ひとつの区切りを得たことを論じた。